

ATIS 第 371 回(9 月度)例会報告

新年度最初の例会は約 70 名の参加を得て金沢工業大学大学院虎ノ門キャンパスで開催され、代表幹事報告に続いて 2 つの講演が行われました。

最初は、東京工業大学地球生命研究所副所長黒川顕教授による「メタゲノミクスと未来社会」と題して講演を頂きました。

星と顕微鏡による細菌の似た写真に始まりました。細菌は人間、自然環境のどこにでも生息し、星の数を上回る 10 の 30 乗個にもなる世界です。従来、培養可能な細菌しか解析できないことから、ほんの一部しか解明されなかった細菌の世界が、遺伝子(ゲノム)分析技術・装置の発展とスーパーコンピュータの活用により、状況が一変しました。収集した細菌群集から膨大な遺伝子抽出と分析結果を解析することで、あらゆる細菌の世界の解明が可能となりました。その結果、多様な分野で遺伝子情報の活用が期待され、「メタゲノミクス」の世界が出現し始めています。



事例紹介では、C.Venter 博士による遺伝子情報のビジネス化、サルガッソー海での有用な細菌の探索活動の紹介がありました。次に自身らの研究では、日本人の腸内細菌群集をメタゲノム解析、さらにその分類化を明らかにした結果、食品や医薬品業界での活用が

注目を浴びていること、さらに農業では土壌中の細菌群集解析や農薬の影響解析が脚光を浴びはじめていることの紹介がありました。

米国や EU では、メタゲノム解析情報の有用性が強く認識され巨大予算のプロジェクト直ぐに始まりました。しかし、日本では立ち上がりが遅れてしまったとのこと。急速に展開し始めた細菌のデータベースを核とするゲノム情報立脚型社会の到来を分かり易く紹介を頂き、将来への期待など興味が尽きぬものでした。

次に、東京大学産学連携本部知的財産部長小蒲哲夫氏による「産学連携—東京大学の知財

関連活動を踏まえて」と題して講演を頂きました。

企業でのご経験など自己紹介に始まり、日本の 10 大発明の紹介、自社開発(垂直統合)が主流であった研究開発が産学連携(水平分業、オープンイノベーション)の時代となった背景、その中で大学の役割は多様化した中で TLO(特許、ベンチャー、技術指導、共同研究等)の役割、産学連携に関する近年の出来事など、まず全体像を紹介を頂きました。

続いて大学の現場業務経験を通しての話となりました。大学等が特許出願する意義や職務



発明について法人化後知的財産の機関帰属、産学連携を行う上での大学特有の留意点(大学業務との整合性、大学としてのインテグリティの保持、社会貢献と利益相反マネジメント、研究者の流動性・国際性や兼業、学生の存在、秘密情報の管理)、日米の産学連

携活動の比較(歴史、共同・委託研究)、研究成果の学術的な価値(サイエンス・リンケージ)、技術移転閑話としてパテントパトロール、知的創造サイクルに関する話題など、現場にいたからこそ考えたこと、感じたことを含めた実情に触れ、興味深い話でした。

最後に、東大 TLO の人気が高く優秀な女性職員が増加してきていること、TLO 人材に関する日米比較、日本の産学連携はどこに行くのか? など多種多様な切り口から話題が尽きませんでした。